

2011国際森林年

国際森林年の国内テーマ

森を歩く

未来に向かって日本の森を活かそう
森林・林業再生元年



2011・国際森林年

●国際森林年ロゴマーク

人々の居住環境や食料・水等の供給、生物多様性保全、気候変動緩和といった森林の多面的機能が、人類の生存に欠かせないものであることを訴えるデザインで、「Forests for People(人々のための森林)」というテーマを伝えるものです。世界の森林の持続可能な経営、保全等における人間の中心的役割を称えています。

「国際森林年」ロゴマークの使用登録申請

「フォレスト・サポーターズ」の登録申請後、「国際森林年」の活動概要を記入することで、ロゴマークをご使用いただけます。

ログインして
使用申請

法人(団体)登録して
使用申請

ロゴマークは簡単に入手できます

※「情報(普及啓発)としての使用」に限られます

ロゴマークを使用するには、国連森林フォーラムのホームページから英文で「責任免除書」を送付する手続きが必要ですが、フォレスト・サポーターズに登録すると日本語による簡単な手続きで使うことができます。フォレスト・サポーターズの登録画面から、必要事項への同意及び活動宣言の書き込みを行って取得して下さい。名刺やポスターなどにお使い下さい。

手続きはこちらから → <http://www.mori-zukuri.jp/contents/kokusai/>

2011国際森林年の趣旨

前回1985年の森林年以降、世界の森林をとりまく状況には新たな展開がありました。1992年にブラジルの開かれた地球サミット(リオ・サミット)において、森林の保全と持続可能な経営の重要性が指摘されました。これを契機に、2006年12月の国連総会において2011年を国際森林年にすることが決定されました。森林に対する世界の市民の理解と参加を促すため、国連森林フォーラム(UNFF)が中心となり、世界でさまざまなイベントや広報活動が実施されます。

我が国の国内テーマ「森を歩く」は、国民による森林への理解の入口として、容易に参加できる具体的な行動を提案するものです。国民が森林を訪れることにより、森林とのきずなを取り戻すとともに、森林への理解と参加の高まりが、林業を含む地域産業へ波及することも意図しています。

2011年は、「森林・林業再生プラン」の実施元年でもあります。「森林・林業再生元年」を契機に、次代に豊かな森を引き継ぎ、くらしの中に木を取り入れることが進むよう期待を込めて、再生元年と併せて「未来に向かって日本の森を活かそう」というサブテーマを設けています。

国際森林年ブリッジングセレモニー



昨年12月18日、「2010国際生物多様性年」から今年の『2011国際森林年』に引き継ぐブリッジングセレモニーが石川県立音楽堂邦楽ホール(金沢市)で開催されました。この式典は国際生物多様性年クロージングセレモニーに続いて開催されたもので、スピーチに立った鹿野農林水産大臣は、国際森林年の活動が世界レベルで展開され、持続可

能な森林経営が推進されるよう、期待を述べました。

生物多様性の保全は、森林の多面的機能の1つです。森林の整備・保全の推進に国民の理解が深まり、健全な森林が増えていくことは生物多様性の保全に大きく寄与します。昨年の盛り上がり方が更に大きくなるよう、国際森林年の取組を推進していきましょう。

なぜ今、国際森林年国内委員会 国際森林年なのか



12月16日、国際森林年の活動を推進する国内委員会が立ち上がりました。各界の著名人が名を連ねた第1回会合では、国際森林年の趣旨や世界や我が国の森林の状況や課題等を林野庁から説明した後、取組の方向や国内テーマについて活発な議論が交わされました。

委員からは
・流通から製造業まで国産材を使うシステムを作るべき
・現場で活躍する本物のフォレストラーを育ててほしい

・100名山のように、森を歩く50選を普及してほしい

・林野庁職員自らが「森を歩く」を実践すべきなどの意見が出されました。また、国内テーマについては、「親しむ、関わる」という面が入口になるようにという意見、林業再生を全面に出すべきという意見など幅広い観点で議論されました。

国内委員会は、今回を含め3〜4回開催される予定ですが、今後、国連への報告、記念会議等に関する議論が行われる予定です。



国際森林年国内委員会委員 (五十音順)

赤池 学

(ユニバーサルデザイン総合研究所長)

天野 礼子

(作家)

飯塚 昌男

(日本林業協会会長)

出井 伸之

(美しい森林づくり全国推進会議代表)

内山 斉

(日本新聞協会会長)

草野 満代

(フリーアナウンサー)

坂本 龍一

(音楽家、モアトウリス代表)

佐々木 毅

(国土緑化推進機構理事長)

C・W・ニコル

(C・W・ニコル・アファンの森財団理事長)

仁坂 吉伸

(和歌山県知事)

沼田 早苗

(写真家)

速水 亨

(速水林業代表取締役社長)

広瀬 道貞

(日本民間放送連盟会長)

宝月 岱造

(日本森林学会会長)

三村 明夫

(日本プロジェクト産業協議会会長)

宮林 茂幸

(東京農業大学教授)

養老 孟司

(日本に健全な森をつくり直す委員会委員長)

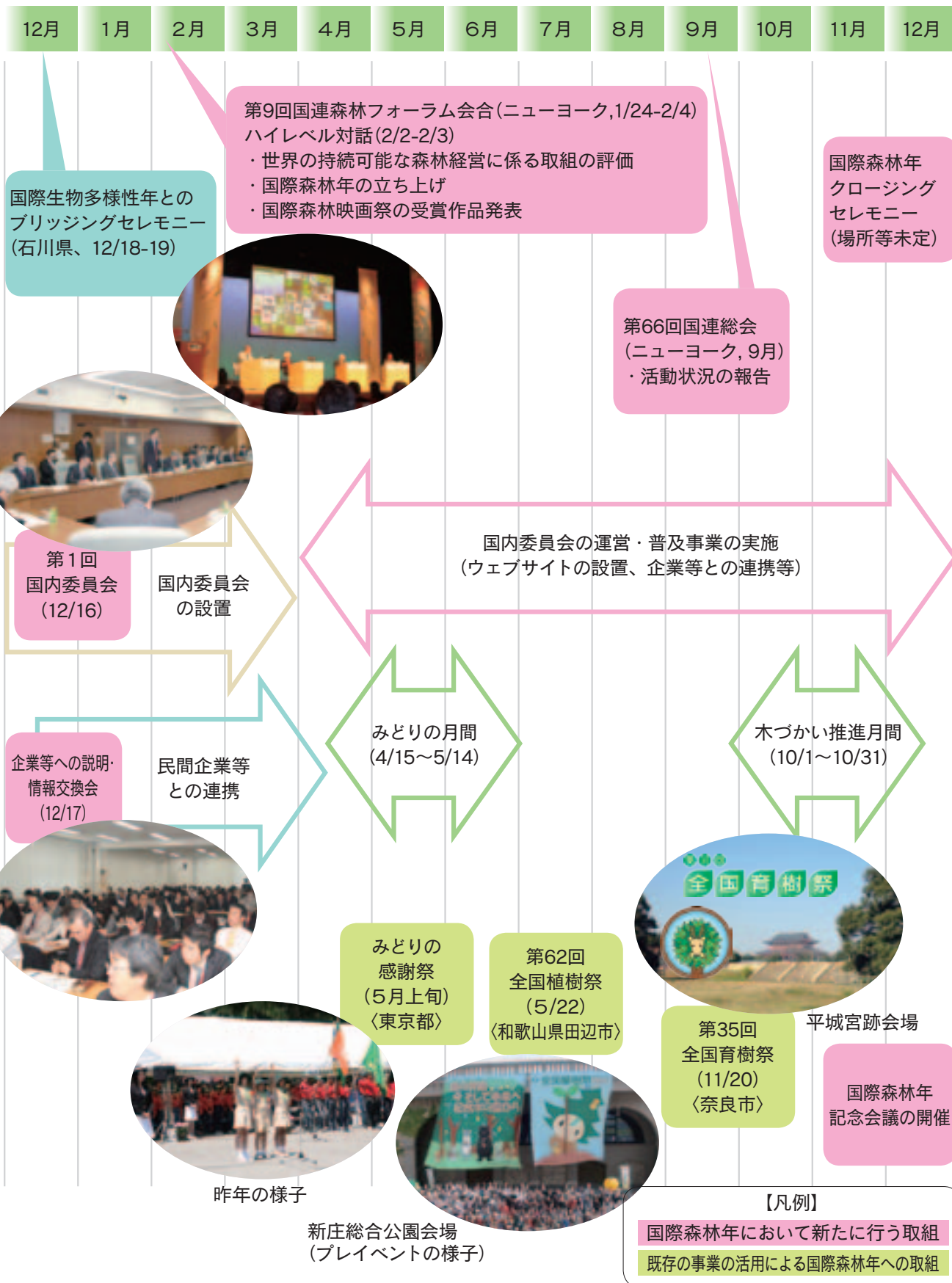
(オブザーバー)

外務省 環境省 観光庁



国際森林年における主な取組スケジュール

2011・国際森林年



昨年の様子

新庄総合公園会場 (プレイベントの様子)

未来に向かって日本の森を活かそう

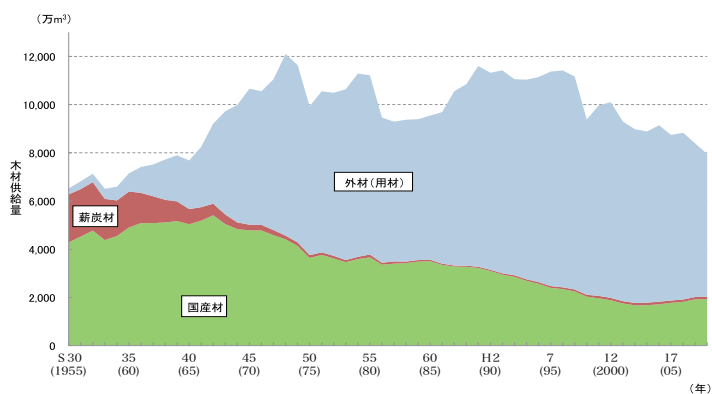
世界の森林減少は続いています。2000年から2010年の10年間に世界で減少した森林面積は、日本の国土の約1.5倍にも上りました。中でも、南米・アフリカ地域での減少が著しく、地球環境全体に大きな影響を及ぼしています。我が国は国際協力等により、その歯止めを努力しなければなりません。

これに対し、我が国は国土の約7割が森林であり、持続可能な社会の基盤となりうる資源を豊富に有しているといえます。国際森林年を契機として、国民の森林への理解と参加が高まれば、我が国の森林資源を未来に向かって十分に活かしていくことが可能になります。

里山の暮らしと森林

かつて里山では、住民が森林から様々な生活の糧を得ていました。伐採した木を建築材に利用することはもちろん、薪や落葉を採取して燃料・肥料に利用したり、キノコを栽培したりするなど、生活面で人と森林は密接に関わってきました。しかし、建築様式の変化、石油中心の燃料消費などにより、そのかわりは薄くなりました。

●木材供給量の推移(用材・薪炭材)



資料：林野庁「木材需給表」

注1：国産材は国産用材としいたけ原木の合計である。

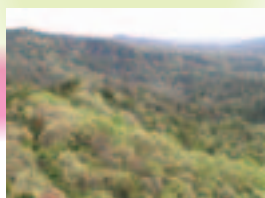
注2：薪炭材は国産薪炭材と輸入薪炭等の合計である。

日本の森林資源は今

世界の森林とは課題が異なります



滋賀県野洲市
(大正元年頃)



(平成21年)



資料：林野庁業務資料

注1：各年の3月31日現在の数値である。

注2：四捨五入の関係で、総数と内訳の計は必ずしも一致しない。

写真提供：滋賀森林管理署

我が国の森林蓄積は、この40年あまりで2倍強(H19.3.31 現在)になりました。特に、戦後の植林により整備してきた人工林は5倍に達するレベル(S41: 558百万m³→H19: 2,651百万m³)。人工林面積を年齢別にみると、その35%が木材に利用できる年齢になっており、10年後には6割に届く見込みです。引き続き間伐等の手入れが必要ですが、利用資源は増加してきています。人工林から生み出された木材が建築材等に使用されていくことが私たちの生活に欠かせない水源のかん養など機能が十分に発揮される元気な森林をつくることにつながります。

森林の多様な価値

育成の時代から活用の時代に入った我が国の森林資源には、多様な価値があり、人と森林や木の新たななかかわりが期待されます。

癒しをもたらす

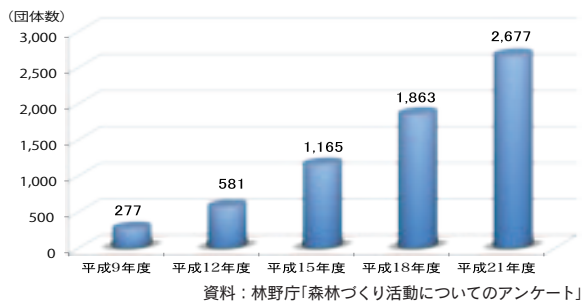
自然から切り離され、ストレスの多い都市生活者には心身のバランスを崩す人が少なくありません。森林ボランティアの活動を通して楽しく汗をかいたり、森を歩き木とふれあうことによる森林セラピーの効果が注目されています。



社会貢献活動で森にかかわる

近年盛んになっている社会貢献活動の一つとして、森林ボランティア活動は広がりを見せています。平成9年度に277団体だったボランティア団体数は平成21年度には2,677団体に増加。里山はこうした活動のフィールドとなっており、今後もその広がりが期待されます。

●森林ボランティア団体数の推移



コンクリート空間から木の空間へ

木には温かみがあり、癒し効果があります。木造校舎でのインフルエンザによる学級閉鎖発生率は鉄筋コンクリート造校舎より小さいというデータもあり、健康素材(ケアマテリアル)として有用です。



▲長野県川上村立川上中学校

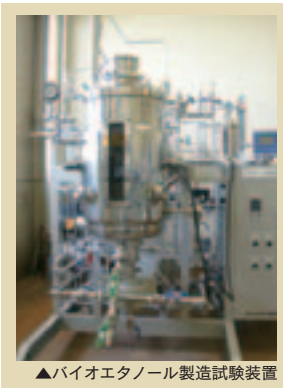
▼「顔見え50選・青ヒバの会」



新エネルギーへの活用

かつての薪炭から石炭、石油へと主要燃料は転換してきましたが、二酸化炭素の排出による気候変動が深刻な問題となっています。こうした中、近年再生可能なエネルギーの利用が注目されています。

木質バイオマスは、熱源としての利用が広がりつつあり、石炭火力発電所での混合利用も始まっています。また、木質バイオエタノールは新エネルギーとして製造実証が進められています。



▲バイオエタノール製造試験装置